

私の一番好きなの、居場所

ロサンゼルス禅センター

黒川麻子

ロサンゼルス禅センターに行くには、まず少し治安の悪い地域を通らなくてはなりません。

赤信号で止まっていると、ホームレスがやってきて車の窓を洗おうとします。手を振って断つてみてもだめ、彼女は生きるために必死です。

一度朝の四時に彼女を見かけたことがあります。禅センターへの道のりには、鉄格子の家やオレンジやピーナッツを売っている露店が並んでいます。ノーマンディー通りで、右に曲がると、子

供の泣き声が赤れんがの建物からよく聞こえてきます。

左側に「ロサンゼルス禅センター」と書いてあるサインが見えてきます。ここは、私の最も好きな居場所です。サンガハウスに入ると、出来たてのコーヒーの香りの中で、新聞を読んだり、会話をしている人が、何人かいます。典座の円通（えんとう*）が、台所で料理をしている、聞かなくても私は知っています。彼女は、今朝、まだ暗いうちに起きて、私達のために、



この料理を作っているのです。オーブンからは焼かれているケーキの甘い香りがただよってきます。二階では、毎週、三日間オフィスでボランティアする玄心（げんしん*）が今日も働いています。禅堂ではシユク（*）が床ふきをしている。彼女も毎週、ボランティアで床をふきに來るのです。内庭では、ドウマン（*）が、参坐に集った人々とコーヒーを飲みながら、会話をしています。

二年前、急に前角老師が、お亡くなりになってしまい、私は心のささえを失ったような想いをしました。前角老師は、私の師僧（如元先生）の師僧であり、私自身もいろいろとお世話になった方でした。私の師僧の如元先生は一九七〇年から前角老師と修行しており、私は、先生の悲しむ姿を複雑な気持ちでうけとめました。その頃のサンガは老師の死でショックを受けており、皆バラバラの方向へと次第に別れていきま

した。新しい先生を探しにいたり、禪以外のものを捜す人もいました。私は、まるで、自分の家族を失っていくような気持ちでした。このとき如元先生は私に言いました。

「身も心も修行に励むと、何もかも、大丈夫だ、心配することはない。修行するには、坐蒲しかいらぬ。トレーラーの中でだって、修行ができる。」

如元先生の修行に対する強い信念についてゆくしかなかったのです。その年の夏、如元先生はロサンゼルス禪センターの住職になりました。

最初のうちは、私は禪センターの治安の悪さが心配でした。禅堂で坐禅を組んでいても外の騒音が気になって、なかなか落ち着けなかったのです。その頃は、まだセンターから二時間北のサンタバーバラに住んでいたため、平日にはセンターへは来ることができませんでした。平

日に如元先生以外に、たった二人、エンショウ（*）とソウリュウ（*）しか、朝の坐禅に参加する人がいなかったことが、耳に入りました。近所の環境や、治安が悪くなってゆくのと同時に、センターへ足を運ぶ人も少なくなっていたのです。如元先生が前に言ってくれた言葉を思い出しました。

「大丈夫だ、心配することはない。」

私は、先生はこの状態でも全く不満を感じていなかったのかと、不安な気持ちになりました。この中で如元先生は、朝晩の坐禅を一日も欠くことなく、こつこつと坐禅をしていました。

こうしているうちに、周囲の環境が少しずつ変わっていくように思われました。正確にいえば、私の周囲に対する見方が変わっていったのです。日曜日には、町の人々が正装して、教会へ歩いて行くことを知りました。また、周囲の人達がお互いに笑顔で挨拶を交わしているのに

気が付きました。ホームレスの女性がまだ車の窓を洗い、まだ赤れんがの建物から子供の泣き声が聞こえてきます。どうしてこのことが、私が禅センターへ行くことの足止めになろうか。私はいつも「衆生無辺誓願渡」と、となえていくせに。

去年の八月、円通は赤れんがの建物へ子供たちのために、お皿にケーキを山にして持ってきました。如元先生がいつも私に「今いる所が私の修行の場である」といつてくれる言葉の意味が次第にわかっていくような気がしました。如元先生はあいも変わらず朝晩こつこつと坐禅修行に励んでいました。朝の坐禅に出る人が次第に増えていきました。今年の九月に私は家族でロサンゼルスへ引越してることが出来ました。

日曜日の禅センター、伝鐘が鳴り、私たちは禅堂へ入っていく。維那が「まかはんにゃはら

みた」と、唱えます。辺りを見まわすと温かいサンガにつつまれていることを感じ、心の中で、今もこつこつと坐禅修行をしている如元先生に合掌いたしました。

注 *は人の名前―授戒名―です。

